

俳雑

第5回

【句会三つ】

八木 忠栄

私事のおつづき。前回「五〇歳を過ぎたころ、親しい詩人たちが集まっている句会に誘われた」と書いた。「余白句会」のこと。同会には俳人や画家も加わっている。

詩は個人作業だけれど、句会という時間を共有し、俳句という《座》で率直にワイワイやるのはじつに楽しい。師匠なる者は置かない。いわば「同人」である。でも真剣に遊ぶ。真剣に遊んでいるのだが、あくまで「余白」の精神を忘れていない。缶ビールを飲みながらの披露である。俳人諸氏には怒られるかも。余計な気遣いも野心もない。こんな句会があってもいいではないか。「余白」の精神(?)を貫いている。時々俳人をゲストに招く。

私は他に二つの句会にも所属している。一つは愉快な人種がいろいろと集まっている「かいぶつ句会」。画家、役者、落語家、歌手他、得体の知れない「かいぶつ」どもがどこからともなく集まってくる。句会はワイン飲み放題、しゃれたお料理食べ放題。話題は多岐にわたる。

それと企業OB中心の「有楽町メセナ句会」。四谷で開催しているのに「有楽町…」とはいかに？ 女性が差入れる飴玉をなめながらの句会、最後にやる連句も楽しみ。